

第1章 冬の日



井上さん夫妻はクルマから降り立つと、少しのあいだ、その場に立ちつくした。

目の前に二階建てのアパートが二棟ならんでいる。白い外壁は一見すると石材らしく思えるが、明らかに新建材のまがいもので、日のあたるところは薄黄色に変色しはじめていた。一棟にそれぞれ住戸が四つ。外壁を大きめに切り取った窓は、どれも言い合わせたように白いレースのカーテンで閉ざされていた。

すぐそばの道路から駐車をかねたアプローチがつづいていて、黒いアスファルトのところどころに靴底のかたちをした泥が点々とついている。それが、わずかな冬日のなかで微妙な白っぽい光をたたえていた。泥に含まれた水が凍っているのだらう。

十二月三日。午後四時すぎ。外気は冷たく、耳たぶや指先を凍えさせている。屋根付きの自転車置き場や植え込みの根元などに、早くも夕闇がうずくまっている。

「今日から、ここで暮らすのかね」

だれに言うともなく、井上さんがつぶやいた。

背後で奥さんが黙ったまま、夫の背中を見つめていた。

二人とも身につけられるだけのセーターやコートをまとっていた。その着ぶくれた姿は、ふだんよりずつと太って見え、じつさいクルマの乗り降りにも苦勞するほどだった。

「しばらくは静養してちょうだい。……いろいろたいへんだっただから」

運転席から降りてきた娘の洋子が言い、クルマの後ろへまわってトランクを開けた。

「とにかく環境は抜群だわよ、お母さん。すぐそこが湧き水のある公園だし、この建物の裏は広い雑木林なのよ。明日、散歩するといいわ。気持ちが落ち着くから」

せいっぱい慰めようとする気持ちが声にもあらわれていた。

しかし、井上さん夫妻は応じるようすもなく、その場に立ちつくしたままだった。

洋子がトランクから段ボール箱を抱えだして、せわしなくアパートの入り口へ向かった。

二段だけの階段を上がり、箱を玄関ドアに押しつけるようにしながら、片手でポケットから鍵を取りだした。

ドアを開けると、すぐ手元にあるスイッチを押した。暗さの増していた周辺がほんのり明るくなり、そこだけ冷たい外気からまぬがれているようだった。

洋子は箱を玄関のなかへ押し込み、ふたたび戸外へ戻った。

井上さん夫妻は元のところに、そのままの姿勢で立っていた。

「ねえ、お父さん、まだ荷物があるんだけど」

二個目の箱を抱えながら、洋子が声をかけると、ようやく井上さんが振り返った。

奥さんは、ほんやりと夫の顔を見上げています。その肩が細かく震えていた。

「さあ、お母さんも軽いものを運んでちょうだい」

洋子は箱を抱いて玄関へ向かいながら、ことさら声をはずませた。

「わたしは、これ運び入れたら、ヒーターに点火するからね」

ようやく井上さんが大きな身体を揺らしてトランクのそばへ行き、残っていた段ボール箱を持ち上げた。箱のまわりに、たくさんの手提げ袋が積んであった。デパートの袋から覗いているのは見おほえのあるものだった。

「おい、……これはアルバムじゃないか」

「あら、そうですか」

のろろと近づいてくる奥さんが胸に、なにか丸いものを抱いていた。

サッカーボールぐらいの白い花瓶だった。引き払ってきた家の、応接間の飾り棚にのっていたものだ。およそ三日に一度きまつて、彼女はそれに季節の花を活けていた。

「なんだ、そんなものを抱えてきたのかね」

井上さんが段ボール箱を運びながら苦笑すると、奥さんは叱られた子どもみたいな顔つきで、花瓶を抱きしめて見返してきた。

「だって、わたしのだいじなものなんですよん」

「そうかい、そうかい。……ほかにもだいじなものがたくさんあったらうかね」

井上さんは言いすてるようにして玄関へ向かった。

開け放してあるドアのなかから、明かりとともに灯油の臭いが流れだしていた。

「火のつきがよくないのよ。おかしいわね」

洋子が床に膝をついてヒーターを覗き込んでいた。

井上さんは段ボール箱を床に置いてから、アパートの内部を見まわした。

玄関の狭い靴脱ぎの先は、八畳ほどのダイニングキッチン。ほとんどのスペースを、大きなテーブルとそれに合った四脚の椅子が占領していた。白い壁と間仕切りの白い板戸の向こうは畳敷きの部屋らしく、そこへわずかに明かりがさしている。玄関のすぐ右手に板の間があり、床いっぱいを占めた大小の段ボール箱が天井まで積み上げられていた。

——これが2DKというやつだな。

新しい住まいを見るのは、これが初めてだった。引越しいについては、すべて洋子に任せきっていた。必要最小限の家具と寝具と、衣類などを詰めた段ボール箱は、彼女の采配で引越し業者が前日までに運び込んでおいたのだ。

だいたいのことを洋子から聞いてはいたが、これほど狭いとは思わなかった。

——ここで、これからずっと暮らすわけか。

ヒーターの前から立ち上がった洋子が、片手で宙を払いながら、

「ああ、いやな臭い。やつと火がついたわ」

と、うんざりしたような声で言った。

井上さんは急いで背を向け、玄関から出た。

暗くなつてきた戸外に、さっきのまま奥さんが立つていた。

「ヒーターの火がついたから、なかに入つて温まつてろよ」

声をかけると、花瓶を抱きしめたまま、ゆつくり歩きだした。

その丸めた背中を見送りながら、井上さんはひそかに溜め息をついた。

——まるで空気の抜けた風船みたいだな。

ふだんは元氣いっぱい、てきばき家事をこなしていた奥さんが、急にほんやりしてしまつたのは、ちょうど一カ月前からだ。長いあいだ住み慣れた家を、どうしても引き払わなければならぬと決まつたときだつた。

そのことを井上さんが伝えると、奥さんは信じられないという顔をして、

「この家を出ていかなきゃならないなんて。そんなのいやよ」

と、いまにも泣きだしそうに大きく目をみひらいた。

最悪のじたいになりそうだということを、それまで詳しくは話さなかつた。よけいな心配をかけまいとしたのが、かえつてよくなかつたようだ。とつぜん家を失うことになつたら、奥さんでなくても、だれだつて平静でいられるわけがない。

「しかたないんだよ。……会社が倒産したんだから」

と、井上さんは子どもをなだめるように言つた。

「工場だけでなく、この家も抵当に入つてるのは知つてるだろ。最後まで守ろうと思つたんだが、どうにもならないところまできてしまつた。……わたしも無念なんだよ」

出ていくまでに一カ月の猶予はもらったが、そのあいだに新しい住まいを見つけて引越さなければならぬ。同じ広さの家に住めるはずもないのだから、いまある家具や調度品なども整理して減らしておく必要がある。

井上さんが説明しているあいだに、しだいに奥さんの顔から表情がなくなつた。目もうつろで、まともに物を見ているけはいがなかつた。

「おい、しっかりとしてくれよ。これから、たいへんなんだからな」

そう言うと、ようやく目に焦点が戻つて、かすかにうなずいた。しかし、すぐにまた、ほんやりした表情になつてしまふのだった。

けつきよく洋子に頼んで、彼女の家の近くに賃貸アパートを探してもらつた。不動産業者との手続きをしたのも彼女だった。

引越先を決めたあとで、家具類のほとんどを処分しなければならぬとわかつた。アパートは、スペースが元の家の四分の一ほどもなかつたのだ。

「わたしの家へ運ぶにしても、せいぜいタンスと本棚とドレッサーぐらいだわ。ほかに、もらつてくださる方がいたらいいんだけど」

家具と調度品の主なものは、井上木工所の製品だった。しかも、井上さんが若いころにつくつたものも多く、とうてい手放せるわけはなかつた。

「古道具屋さんと呼んだら、どれもこれも二束三文のゴミ扱ひをされてしまふわ。そうかといつてオークションに出品するわけにもいかないし」

さんざん考えた末、知っているかぎりの人びとに声をかけて無期限の催促なしで預かってもらうことになった。つねづね井上木工所の家具を好んでくれている知人たちがやってきて、運送費用を自前で喜んで運んでいってくれた。

井上さんは運びだされる家具たちを見送りながら、

「いつまた会えるかわからないんだなあ」

と、つぶやいたが、もう会うこともないだろうと内心では覚悟した。すると、それらを製作したときのことが、まざまざと思いだされて、不覚にも涙ぐんだのだった。

「ねえ、お父さん、どうかした？」

とつぜん洋子の声が出た。

たちまち空気の冷たさが染みてきて、井上さんは思わず身震いをした。

「このアルバムを、お願い。……あとは、わたしが運んでいくから」

洋子がトランクのそばで、手提げ袋を重たそうに両手で差だしていた。

いたるところ荷物だらけの2DKに、ようやく食事をする場所と寝るスペースを確保したのは、午後六時すぎだった。

ほっとする間もなく、洋子が帰り支度をはじめた。

「たいへん。きつと真也がお腹を空かして、ひっくり返ってるわ」

登校前に引越しのことを話しておいたのだが、こんなに時間がかかるとは予想しなかった。真也には祖父母の身に起こったことの事情を知らせていないから、おそらくママ

に忘れられて、放りっぱなしにされたと思ひ込んでいた。

そんなことを言いながら、洋子はあわただしく帰っていった。

「真也くんは謝つといてくれ。……そのうち遊びにくるよようにしてな」

井上さんは娘の背中へ声をかけてから、ふと淋しさをおぼえた。

——なにも、あわてて帰らんでいいだろうに。男の子を甘やかしちゃいかんよ。

胸のうちでは、そうつぶやいていた。

洋子が帰ってしまうと、見知らぬ部屋に奥さんと二人で置き去りにされたような気持ちになった。いつも二人きりに慣れているのに、今日ばかりは無性に侘しさがつのつた。

「おい、……飯はどうする？」

と、敷いたばかりの夜具に座り込んでいる奥さんへ話しかけた。

奥さんは相変わらず焦点の合わない顔つきで、積み上げた衣装箱を眺めていたが、しばらく待つても返事はなかった。

井上さんは下駄箱の上にお詠え向きなものを見つけた。おそらく近所の蕎麦店のものらしい、ラミネート加工をほどこされた二つ折りの出前メニューだった。洋子が置いていたのか、あるいは前の住人のころからあるのかもしれない。

「ちょうどよかった、引越蕎麦にしようよ」

そう言うと、奥さんがゆつくり見上げてきて、ほのかな笑みを浮かべた。

井上さんは、ほっとしてメニューに目を転じた。メニューを遠のかせると、老眼鏡がな

くても読むことができる。一番上の列を指先でなぞっていき、

「天ぶら蕎麦もいいが、胸にもたれるといかんからな」

と、つぶやいて下の列へ目を落とした。とたんに値段が安くなっている。

「卵と同じにしようと思うんだが、それでいいかね？」

「ええ、そうしましょ」

奥さんの答えを聞いてから、井上さんはコートのポケットから携帯電話を取り出した。しばらく黒い液晶画面を見つめていたが、やがて決心したように電源ボタンを押した。このところ、ずっとオフのままにしていた。

メニューの表紙に記してある電話番号を押しながら、電話をかけるのは三週間ぶりだ、と思った。こちらからかけることがなくなつたばかりか、かつてはひんぱんに鳴っていた着信音も、一カ月前からびたりと止まつた。番号を知っているのは、奥さんと洋子のほか、かつての秘書と数人の幹部社員だけだった。

もう仕事用には必要なくなつたのに、こうしてポケットに入っていたのは、これまでの習慣で無意識に突つ込んだのだろう。

——そういえば引き払つてきた家の電話は、この一カ月のあいだ鳴りつづけていたが、いままも人気のない家のなかで鳴ってるんだらうか。

そんなことが、ふと脳裏をかすめた。しかし、すぐに思い直した。洋子が手続きをして、今日にでもNTTが止めたはずだ。

「ああ、もしもし、湧水ハイツというアパートをご存じかな？ その102号室に引越してきた井上だが、卵とじ蕎麦を二つ、出前してくれんかね」

「湧水ハイツの井上さん、卵とじ蕎麦を二つね、ありがとうございます」と、若い女の声が早口で復唱した。

——他人の声をひさしぶりに聞いたな、と井上さんは思った。

引き払った家にかかつてくる電話のほとんどは知らない相手からだった。債権者と名乗る数人で、井上木工所から支払われるはずだった塗料、金具、木材の一部といった細々としたものの代金を、まだ受け取っていないと電話口で主張した。

そうしたお金は、銀行をはじめとする債権者の代表たちが協議したうえで支払われることになっている。そのように誠意を込めて説明していたのだが、それまで待てないから、ただちに払ってくれ、と言つてきかぬのだった。

債務の整理にたずさわっている弁護士に相談すると、おそらく債権者から委任された取り立て専門の業者だろうという。早朝から夜更けまで、時間を無視したようにかかつてくる電話攻勢に、とうとう音を上げて、いつさい受話器をとらないことにした。

「支払えるものなら、すぐにも払いたいんだが」

井上さんは電話が鳴るたびに身の縮む思いで、そうつぶやくのだった。

出前の蕎麦が届いたので、井上さんと奥さんはテーブルをはさんで向かい合い、おもむろに井からラップを剥いだ。美味しそうな匂いがただよいだし、つられて井のなかを覗き

込んだ二人の鼻先を温めた。

人心地がついて蕎麦を食べたしたが、ふいに奥さんが箸を止め、深い吐息をついた。見守るうちに細い肩を小刻みに震わせて、少女のようにしやくりあげはじめた。

井上さんは目をそらして、黙ったまま蕎麦を食べつづけた。

——みじめな思いをさせて可哀そうだが、こつちも同じなんだよ。

会社の経営状態がおかしくなつてから、ずっとこのような日のこないことを祈っていた。まさか、それから七カ月もたないうちに現実になるとは思わなかった。

——ほんとに激流のようだった。あの流れを止めることはできなかった。

ふいに卵とじ蕎麦が味を失い、井上さんの顔に苦渋がひろがった。つらい記憶が、またよみがえった。これまでも繰り返り返し苛まれてきた、悪夢のような日々……。

はじまりは、ゴールデンウィークが終わったばかりの五月十日だった。

「社長、……たいへんなことになりました」

と、営業部長が井上さんのデスクにやってきて、声をひそめて言った。

遅めの昼食をとっていた井上さんが目を上げると、部長は顔をひきつらせていた。

「立花家具店が今日、破産宣告を受けたそうです」

「なんだと。まさか、あの立花さんが……」

東京でも最大手の老舗だった。新宿に本店を持ち、各都市に支店をひろげ、店舗数では

全国でも一番ともいわれていた。井上木工所にとつては長い付き合いの上得意である。

本店の店長は、次期社長と目されている立花家の長男で四十代半ばの遊り手だが、井上木工所のコントロー・ファニチャーを主力商品として全支店へひろげてくれていた。

「きみは密接にお付き合いしていたのに、気づかなかつたのかね？」

「はあ、連休前にも店長さんとお会いしましたが、まったく……」

五十歳をすぎた営業部長が、おろおろして答えた。

すぐに確認をとらせると、やはり破産は事実で、すでに管財人も決まっているという。まもなく噂が伝わってきた。本店の店長が郊外型店舗を増やそうとして失敗し、その間に大規模な手形詐欺に遭つたという。そのほか、さまざまな噂がひろまつたが、真相は定かではない。さらに悲劇だつたのは、数週間後、店長が自動車事故で亡くなったことだつた。その報せにも、生命保険を自当てるの自死らしいという噂がともなっていた。

営業部長の報告によると、立花家具店の売掛金は前年度分がそっくり残つていた。また、今年度に入つてからの受注についても前年度とほぼ同じということで、この分について仕入れた材料の支払い予定額はかなりのものだった。

会社にとつて、たいへんな痛手となることは明らかだ。

しかし幸いにも、それまでの経営状態が順調だったので、仕入れ先からの信用は厚かつたし、銀行も緊急の融資依頼に好意的だった。おかげで、余波をこうむつて共倒れするとうじたいだけは、どうにか避けることができた。

また、受注製品のうちの完成品は、営業の懸命な努力によって、すべてを材料の仕入れ額に近い卸値で、取り引きのある他店へ引き取ってもらうことができた。

「ほっとしましたよ、……社長」

と、ようやく営業部長が、ひきつった顔をゆるめたのは五月末だった。

ところが六月に入つてまもなく、新たな危機がやってきた。

取り引き先の西急百貨店から至急の呼び出しがあつて、営業部長が飛んでいった。婦社した部長は前にもまして、こわばつた顔つきをしていた。

「社長、もうしわけございません。……とんでもないことになりました」

「またか、どうしたんだね」

「仕入れ主任から、……当分のあいだ取り引き中止にする、と」

「取り引きを止めるとは、どういうわけだ？」

西急百貨店の家具売り場とは、かれこれ三十年来の付き合いである。しかも、当時の仕入れ主任が井上木工所に訪ねてきて、ぜひともカントリー・ファニチャーを扱わせてもらいたいともうしてたのだった。売り場に専用のスペースを設け、西急オリジナル家具として売らだすと、またたく間に評判となった。

その後、その主任のアドバイスを得て、つきつきと新しい製品を生産するうちに、井上木工所は一種のブランドとして世に知られるようになった。だから、井上木工所の現在があるのは、西急百貨店のおかげといつてもいい。

そういう関係から、代々の主任たちにも特別の愛顧をこうむって、いわば盟友のような付き合いをつづけてきた。それが、とつぜんの取り引き中止だという。

「わが社の生命線を断たれるようなものじゃないか。すぐにも事情を伺いに行こう。もちろん、わたしがじかに主任とお会いしてくる」

「いえ、社長。……事情は伺っております」

「それを早く報告しないか」

「じつは、先の立花家具店からの受注製品が原因です」

と言いさして、営業部長は固く目をつむった。行き場のない在庫品となってしまった家具のすべてを、営業努力で他店に卸したばかりだった。

「……それを先方は安売りの目玉商品にしたそうです」

なんとという失態だ、と井上さんは齒がみした。それでは、ここまで築きあげてきた井上木工所のブランドを、自ら地に墮としてしまったということではないか。

「うろたえると、ろくなことにはならんな」

と、井上さんは自嘲を込めてつぶやいた。

立花家具店の失墜を目のあたりにし、あわてて在庫処分に走ったことを反省したのだ。営業部長は叱られたと思つたらしく、大げさなほど身を縮めて、深々と頭を垂れた。

「こちらの事情は説明したのだろうね?」

「はい。……それはもう」

説明したぐらいで許されるとは、井上さんも思つてはいなかつた。西急百貨店が後押ししてくれていた大切なブランドを、こちらの都合で汚してしまつたのだ。

これで、二つの大きな得意先を、ほぼ同時に失つてしまったことになる。

井上さんは茫然とした。

「これほど易々と経営危機に陥つてしまつとは、いままでの安泰はなんだつたんだ」

あるいは、これまでが運に恵まれていただけなのかもしれない。その幸運に甘えて、だいなところでお断したのだろうか。企業というものは、取り引き相手に支えられて成り立つているのだという事実を、あらためて痛感させられた。

——それからが、たいへんだつた。

井上さんは、悪夢のような日々を断ち切ろうとしながらも、それは無理だと自分に言いきかせていた。いままで何度、むだな努力をしてきたことだろう。

井上木工所は、たちまち経営に行き詰まつた。

なにしろ立花家具店と西急百貨店からの受注を主に生産していて、ほかの取り引き先からの受注量は、その一〇パーセントにも満たなかつたのだ。しかも、長年の得意先が後押しをしてくれなくなると、人気ブランドの価値が薄れたと見てか、どの店も見ると対応が冷たくなつた。

二カ月もたつと、家具の生産は完全に止まつた。作業のできなくなつた職人たちは、毎日出勤してきては、がらんとした工場で所在なさそうにたむろするばかりだつた。

やがて会社の預金は底をつき、給料を支払うことができなくなった。

材料の仕入れ先は、いち早く井上木工所の窮状を察知して、各社とも売掛金の回収に躍起となりはじめた。以前は好意的だった銀行も融資を渋るようになった。工場を含む社は、すでに銀行の担保に入っていて、その限度額を超えた融資はできないという。

「ここで手を引いたほうがいいのではないのでしょうか」

と、懇意にしていた会計士が助言してくれた。

「いったん倒産ということにして、再出発を考えられたほうがいいですよ」

せっかくのアドバイスだったが、井上さんには決心するところがあつた。

——ぜったいに倒産してはいけない。いままで一緒にやってきてくれた職人たちにも、材料の仕入れ先にも迷惑をかけるわけにはいかない。

井上さんは当然のこととして、自宅の土地と家屋を新たな担保に差しだした。

「この家は、井上木工所があつたからこそ建てることのできたのだ」

と、奥さんに話した。

「従業員みんなのおかげで、こんないい家に住めたのだよ」

いつわりのない気持ちだった。四十歳前に創業して以来、約三十年のあいだ順調にやってこられたのは、腕のいい職人たちがいてくれたおかげだ。

会計士の言葉どおりにしたら、彼らを裏切ることになる。たとえ土地と家はぶじでも、心が虚しかったら、とうてい住みつつけることなどできはしない。

——創業当初に戻った気持ちで、職人たちと一緒にまき直してやろう。

初心にかえて魅力ある家具をつくり、西急百貨店に誠意をつくして持ち込めば、きつともう一度チャンスをもたらせるはずだ。また、これまでみたいにブランドに頼ることなく、積極的に新しい取り引き先を開拓していくのだ。

この気持ちを従業員たちにも伝え、彼らもやる気を示してくれた。しかし、一度失った信用は簡単には取り戻せなかった。

デザイナーと職人たちが三カ月かけてつくりだした椅子やテーブルの試作品を西急百貨店へ持ち込んだが、あっさりとは入れを断られた。家具売り場を縮小するという百貨店側の事情もあった。残された売り場スペースには、イタリアからの輸入家具を置くことに決まっていたのだ。

「どうもおかしいと思っていましたよ」

と、営業部長が憤懣やるかたないという表情で言った。

「売り場の縮小も、イタリア家具を入れることも、とつくに決まっていたようです。例の目玉商品の件は、たまたま見つけた仕入れ打ち切りの口実だったんですよ」

あのことがなくても、いずれは同じ結果になったのだと言いたげだった。

井上さんは黙って聞き流した。失望が怒りに変わるのを、懸命に抑えていた。

——あれが末期の瞬間だったな。

だれを責めるわけでもなく、いまではそう思っている。

百貨店側の方針をいち早く察知して、新しい施策を講じるべきだった。井上木工所は気づかないうちに、取り残されていた。現状に満足して、ぬくぬくしているうちに、世の中のほうがどんどん先へ行ってしまっていたのだ。

卯とし蕎麦を食べ終わった井上さん夫妻は、しばらくテーブルに両肘をついて温もりの余韻を感じていた。そうしていると、わずかにでも幸福感を味わえるような気がする。

やがて奥さんが立ち上がってシンクへ行き、湯沸かしポットに水を注いだ。ポットは耐熱ガラスのコーヒーサーバーである。二人分のお茶をいれるには、ちょうどいい。

さつきは肩を震わせていた奥さんも、蕎麦を食べるあいだに気持ちが悪く落ち着いたのか、いつもの平静な表情に戻っている。井上さんは、かすかな吐息をついた。

「さて、風呂の準備でもするか」

つぶやきながら腰を上げて、初めて戸外の音に気づいた。風が吹いているようだ。

ここに来たときから雨戸は閉まったままだから、外のようすはわからない。たしか裏手は雑木林だと洋子が言っていたから、きつと風は林を抜けてくるのだろう。

——それで、音が増幅されるんだな。

ざわざわいうのは木々の枝がこすれる音、ひゅうひゅういうのは枝と枝のあいだを風がすり抜けてくる音、ごとごとというのは雨戸が揺すられる音……。

それぞれの音の意味を考えながら、井上さんはキッチンの隣の浴室に向かった。明かり

をつけて、二つ折りになるガラス戸を開けると、青白いバスユニットがあらわれた。

「おや、こんなに狭いのか」

前の家の浴室の三分の一ほどもなかった。一坪に満たないユニットに湯船と洗い場とが、ほぼ同じ面積を占めてならんでいる。両膝を折らなければ湯船のなかに入れそうもないし、洗い場にあぐらをかいて座ると両膝がドアと湯船にくっつきそうだ。

「おまけに、……なんだ、これは」

湯船のふたを開けて、井上さんは驚きの声を発した。この浴槽には、どうしたことか、湯の噴出口がなかった。つまり追い焚きのできないタイプなのだ。

井上さんは呻き声をあげ、冷たい金属の栓をまわした。蛇口から細々とした湯が出てきて、湯船の底へしたたたた。湯が溜まるのに一時間はかかりそうだ。

前の家の浴室が恋しくなった。ボタンを押しさえすれば、全自動で十五分もかからず、いい湯加減の風呂に入ることができた。そのうえ、チャイムの音と一緒に「お風呂が沸きました」と優しい女性の声で報せてもくれた。

湯船にふたをし、わずかに湯の注ぎ落ちるすきまを開けておいた。冷気のなかで、細かい湯が思いがけないほど大量の湯気を発生させた。

井上さんは浴室のドアを開め、ついでに隣のトイレへ入った。ここにきてからまだ一度も、用を足していなかったことに気づいた。年をとるにつれてトイレへ通う回数が増えているのに、珍しいことだ。やはり、よその家だと無意識に思っているのだろうか。

トイレの狭さにもがっかりした。洋式便器が小さくて、そのうえ位置が低すぎるので、身体の大きな井上さんがおしっこをしようとするとなかなか照準が定まらない。しかたなく膝を曲げて腰を下げ、おそるおそる放水を開始しなければならなかった。

——これから毎日こんなふうにしなければならんのか。

井上さんは泣きたい気分だった。しかし、こうなったのも、元はといえば会社を倒産させてしまった自分のせいなのだ、と思い直すことにした。

新しい寝室となった六畳間には、二人分の夜具が敷かれている。二つの敷き布団がびったりとくっついているのは、壁際にソファが置いてあるからだ。長年愛用してきた古いソファだが、ていねいなつくりで、どっしりした存在感がある。これだけは人手に渡すわけにいかない、と無理に運び込んだものだ。

奥さんはソファに腰かけて、所在なさそうに下着をたたみ直していた。

「風呂に入れるようになるには、しばらくかかるぞ」

そう告げて、井上さんは夜具の上にごろんと横たわった。

雨戸をたてたベランダ側には、32インチの大型テレビがすえられている。前の家のリビングルームにあったときは、ちょうどいい大きさだったが、六畳間には巨大すぎる。

電源を入れ、夜具に横たわってブラウン管を見上げると、ニュース番組がはじまっていた。キャスターの顔が大きくて、威圧されるような気がした。

「いろいろ、たいへんだなあ」

と、井上さんはあくびまじりにひとりごちた。

「慣れるまでにや、だいぶ時間がかかるだらうな」

奥さんは黙ったまま下着をたたみつつけている。ときおり顔を上げてテレビのほうを見るが、どうやら雨戸の鳴る音を気にしているようだ。さつきより風が強くなっていて、しきりに雨戸を揺らしている。そのたびに、だれかが外から叩いているような音がした。

井上さんはテレビを観ながら、うたた寝をはじめた。やがて奥さんに肩を叩かれ、気づいたときにはニュース番組が終わっていた。

「さすがに、くたびれたんだな。……居眠りなんかしたことがないのに」

独りで言い訳をしながら、井上さんは起き上がり、浴室へ行った。奥さんが湯を止めてくれたらしく、ちょうどいいあんばいの湯量になっていた。

井上さんは裸身を縮めながら狭い洗い場にあぐらをかいた。かろうじて両膝が湯船とドアのあいだに収まった。温かい湯気が全身を包み込んだ。

風呂から上がって布団のなかに入ると、いきなり眠気が襲ってきた。奥さんがなにか話しかけてくるのを、うるさいなあと思いつつ、すぐに寝入ってしまった。

どのぐらいたったのかわからないが、ふいに井上さんは目を覚ました。引き絞るような泣き声が聞こえた気がしたのだ。きつと、だれかが夢のなかで泣いていたのだろう。

電灯が消えていて、部屋のなかは暗かった。わずかにダイニングキッチンから明かりが洩れてきている。風はますます強くなり、雨戸を揺らす音も激しくなっていた。

「どうしたんだ、眠れないのか？」

井上さんは板戸へ向かって声をかけた。奥さんがダイニングキッチンにいる。もしかしたら、泣いていたのは奥さんかもしれない。

返事はなかった。しかし、井上さんは起きだしていく気にならなかった。

真夜中に、奥さんの哀しい顔を見るのはつらかった。もしも泣いているのなら、よけいづらさが増すだろう。滅入っている気持ちだが、さらに沈み込んでしまっただけはかなわない。

井上さんは寝返りをうって、眠ろうと努めながら、ふと思った。

——職人たちは、あれからどうしているんだろう。

井上木工所の面々がつぎつぎと目に浮かび上がった。およそ二十人の職人の半数近くは、二十年以上ものあいだ一緒に働いてきた人たちだった。なかには、ふつうの企業なら、とうに定年退職しているはずの年配者もいた。

長年勤めていた会社が急につぶれて、工場も閉鎖されてしまった。行くところをなくした彼らは、さぞつらい淋しい思いをしていることだろう。力のない経営者に恨みを抱いているのではないか。あるいは、信頼を裏切られたと怒っているかもしれない。

固くつむっていた目をひらいて、井上さんは暗い天井へ視線を向けた。

暗がりのなかから、一人の老人がこつちを見つめていた。井上さんに似た大きな身体つき、いかにも頑固そうな老人だった。——ああ、と井上さんは低く声を発した。

「おやじさん、……こんなことになっちゃったよ」

ひとりごと ● チビがきた

リーリとエーバが近所のアパートに引っ越してくる。

そのことをママから聞いたとき、ほくは初め信じられなかった。あんな立派な家に住んでいたリーリとエーバが、駅からだいぶ離れた雑木林のそばのアパートに、どうして引っ越してくるようになったらう。

だけど、ほんとうだということが、すぐにわかった。

リーリんちのチビを、ほくんちで預かることになったからだ。仲よしのチビと一緒に暮らせるのなら、引っ越しの理由なんてどうでもいい。ほくは有頂天になった。

ただ、チビを預かることについては、初めパパとママのあいだで少しモメたよつだ。じつは一年以上前から、チビは子犬のときと同じように家のなかで暮らすようになってたんだ。年をとって身体が弱ってきたし、ときどき咳もするようになったんで、エーバがそう決めたんだって。だから、いまさら外へ出すわけにはいかない。

あんな大きな犬を家のなかで飼うなんて、とパパは渋い顔をしたらしい。

そこをママが説得して、やっとのことで、パパのお許しが出たってわけだ。

チビがやってくる日、ぼくは学校を休みたくて仕方がなかった。

でも、いちはやく察知したママがこわい顔をして、

「そんなに朝から、ぐずぐずしてるんなら、チビは連れてこないからね」

なんて、おどかすもんだから、ぼくは仕方なく登校した。

学校にいるあいだじゅう、チビのことで頭がいっぱいで、授業なんか上の空だった。

放課後は、サッカーの練習をサボった。朝から下痢をして練習になんないから、

と許可をもらいにいったら、めったに休んだことのないおまえがなあ、とコーチがび

っくりしたように言った。とにかく、ほんとに今日は練習になんないんですよ。

ぼくは、大急ぎで家へ帰った。

チビは、ぼくを待っていた。午前中にママのクルマに乗せられてきたのだそうだ。

「おおい、チビ」

玄関に入る前に呼んでみると、家のなかからチビの吠える声が聞こえてきた。いつ

もの太い声だった。ママの話によると、チビはリーリーの家を出てくるとき、さっさと

自分からクルマに乗り込んだらしい。家に着くとすぐ、嬉しそうに鼻を鳴らして嗅ぎ

まわり、ぼくの部屋をいっぺんで当てたそうだ。初めてきたくせに、すごいやつだ、

まったく。

チビは大はしゃぎで、ぼくを出迎えた。ぼくだって大はしゃぎだった。

なにしろ、ぼくらは親友同士なんだもの。

ぼくが家にいるときは、いつもチビが入りついてる。家のなかに大きな犬が暮らしてゐることに慣れてないパパや妹の優香なんかは、廊下でチビに出くわすと、知ってほづいても、すげえびっくりにするらしい。

この優香は、大げさな声で金切り声を上げてしまふ。するとチビは恐縮して、ぼくの部屋へ逃げ込んでくる。

「ごめんね、チビ。僕はおまえの家なんだからな」

ぼくは、そう言つて慰めるんだけど、やっぱりチビは気にしてゐるようだ。

リーリとエーバのところへ連れてつてやるつと思つただけで、もうちゃっとしてかちとママは言う。リーリとエーバは、まだ新しい聲に慣れてないんだぞうだ。